



TITLE:

Yale University Southeast Asia Studies,
Entrepreneurship and Labor Skills in
Indonesian Economic Development, A
Symposium. Introduction by Benjamin H.
Higgins.(Monograph Series No.1), New
Haven, Yale University, 1961,pp.110

AUTHOR(S):

口羽, 益生

CITATION:

口羽, 益生. Yale University Southeast Asia Studies, Entrepreneurship and Labor Skills in Indonesian Economic Development, A Symposium. Introduction by Benjamin H. Higgins.(Monograph Series No.1), New Haven, Yale University, 1961,pp.110. 東南アジア研究 1963 ...

ISSUE DATE:

1963

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54779>

RIGHT:

この書物は、本来、MIT の国際関係研究所におけるインドネシア研究企画の共同調査報告の一部として書かれたものである。しかし、それは単なる調査報告ではない。経験的にも、理論的にも、幾つかの問題の解明を狙いとしている。(1)先ず、インドネシアが直面する政治的統一、経済発展という現実の諸問題の、ジャワにおける社会的、文化的地盤の理解を狙いとし、(2)そのような理解を通じて、宗教・思想と社会の関係一般に関する理論をテストするという意図が含まれている。(3)それに、ともすれば、共同体の intensive な研究に終り勝ちな人類学的研究を、全体の社会的・文化的脈絡の理解にも役立てるように方向づける努力が認められる。

Geertz は先ず、ジャワの伝統社会を、社会経済・文化の観点より、官僚 (priajati)、回教商人 (santri)、農民 (abangan) の三層に区分する。各層は、生活スタイル、社会的地位、宗教・思想を異にし、経済的には、santri が最も豊かであり、社会的には、priajati が最上位に、abangan が最下位に格づけされる。生活の意味を根拠付ける思想面では、priajati がヒンズー的世界観、santri は禁欲的回教現代主義、abangan は、animism、回教、ヒンズー教の混淆した儀礼主義に象徴される Gemeinschaft 的世界観を生活の基調とする。しかし、この点、三者の関係は段階的ではなく、priajati と abangan は開かれた関係にあり、santri は、閉された排他性を持つ。

独立後の国民的統一過程において、各層は、異なった主義、組織の基盤となるが、同時に、各層には、保守、進歩の二層分解が認められる。priajati には、literati 型と intelligentzia 型の両極志向が認められるが、共に国民党の基盤である。santri では、地方的保守層が Nahdatul Ulama 党、都市進歩層は、Masjumi や Muhammadiyah 党の地盤となる。両者共に、排他的な回教政党であるが、前者が、土着思想にやや寛容である。これに対し、伝統的農業経済に依存する農民は、保守的であるが、所謂プロレタリアート化した農園労働者や都市労働者は、革新政党的の基盤となる。Geertz は、夫々の部分層の利害軋轢の調和点を鮮かに分析している。唯、同じ問題に関心を持つ読者の参考のために、用いられた文献が余り挙げられていないのを遺憾に思う。(口羽益生)

Yale University Southeast Asia Studies; Entrepreneurship and Labor Skills in Indonesian Economic Development: A Symposium. Introduction by Benjamin H. Higgins. (Monograph Series No.1). New Haven, Yale University, 1961, pp. 110.

所謂新興国における経済発展の問題は、極めて多元的領域の問題である。それは、単に経済の問題ではなく、同時に、政治、社会や、文化の問題でもある。この書物は、特に、後者の観点より、インドネシアの経済発展を取扱った四つの論文を収めている。一つは、後進国経済発展の問題、特にインドネシアに関する問題に興味を持つ経済学者、Higginsによる、インドネシア経済発展の巨視的な見通しを取扱った論文である。他の三つは、微視的な事例研究である。経済社会学者の Everett D. Hawkins は、batik 工業の経営者層を分析し、英国の人類学者 Leslie H. Palmier は、中国人共同体における batik 工業を取扱い、経済学者 Harold W. Guthrie は、労働力の問題を取り挙げている。いずれもインドネシアの現状を理解する上に、興味ある論文であるが、Higgins の論文は、単に経済発展の問題の所在の理解のみならず、全体社会の構造の理解にも役立つ。

彼は先ず、次のような仮説より出発する。即ち、後進国経済の発展に必要な社会的、文化的条件は、経済合理性を志向する企業経営者層の形成と、企業活動を促進援助する権力と希望の担い手である政治的エリート層である。後者の条件は、後進国経済では、発展の「速度」が特に問題となる為に、極めて重要である。この仮説に基づき、三つの問が設定される。(1)企業経営者層の社会的文化的特質はどのようなものか。(2)経営者層と政治的エリート層の関係は、どうであろうか。

Higginsは、C. Geertz のジャワとバリ島の研究資料、E. A. Pelzer のバタクの研究資料を用いて、この二つの問題に接近する。そして、いずれの場合においても、経営者層は、社会的に、政治のトップ・レベルへの昇進を閉された sub-dominant elite であり、文化的には、禁欲的経済倫理の担い手であることを指摘する。唯、バリ島の場合、それは、旧貴族であるた

め、やや立場を異にする。

政治的エリート層と経営者層の協力関係は、バリ島を除けば、好ましくない状態にある。その理由は、部分的には、ジャワの場合のように、イスラム経営者層と prijaji の政治的エリート層の思想的相剋によるが、又、各層の地域的、階層的利害にもよる。この状態を一層混迷させる要因は、政治の焦点が、経済発展の具体的方策よりも、発展の方向と方法を規定するイデオロギーに置かれている点にあるとし、Higgins は政府の企業に対する態度にやや批判的である。

しかし、イデオロギー論議が、何故重視されるかの理由に対する彼の突込み方は、ややもの足りない。急激に変動する社会においては、イデオロギーの明確化は、政治的にも、民間の自発的協力を得るためにも極めて重要な問題である。いずれにしても、この論文は、以上の如き問題は多角的に研究される必要のあることを示す興味ある論文である。(口羽益生)

J. S. Furnival; The Governance of Modern Burma, 2nd ed. enlarged, 1960, Institute of Pacific Relations, xi+154, mimeographed.

著者 Furnival は、未完の著 The Social and Economic Development of Burma を遺して、60年夏、祖国英国で、惜しまれつつこの世を去った。そして、この7月7日は、はやかれの死の三周忌にあたる。その未完の著をかれの最終作と数えると、本書は、かれのものした最後から二番目のモノグラフである。

本書は、ビルマ連邦の政府機構の解説をおこなったものである。国家的背景・中央政府・地方政治・各州政府の四部構成のもとに、もっぱら憲法の規定に即した機構論的解説がなされている。著者の当初の目論みは、単なる統治機構の形式的制度論的説明に留まらず、機構の実際の機能の態様までを明確に捉えることであつたと思われるが、その意図は、各州政府のばあいを除き、一応かなり尽くされている感じである。

だが、1958年までのビルマを対象とした本書は、それ以後のめまぐるしい政治的転変のために、もはや絶対的な利用価値を喪ったといわれるかも知れない。しかし、なんといっても、これは、他ならぬ Furnival の本である。1902年に ICS の官吏としてビルマ政庁

に任官して以来、任務のかたわら、常時ビルマの現実とそのあるべき姿を学び来たつた。Furnival は、他の誰にもまして、ビルマ政治について語る資格を有している。本書にも、かれの蘊蓄は随所に盛られている。独立運動その他に関する歴史的叙述の一見なにげない個所にも、貴重な断定や資料提供がある。また連邦政府の運営に関しても、ウ・ヌのもとで十年間政府顧問をして働いたかれならではの、正確かつ該博な知識が披瀝されており、本書の存在意義を高からしめている。

Furnival のビルマ研究の無類の特色は、かれが、研究を進め深める際に、つねに、ビルマ国民への愛情、ビルマ国民の福祉安寧への心遣いを忘れなかったことである。ビルマ政治の研究も、近年における地域研究の発達と共に、従来の現地事情通の好事家的研究から、科学者の問題意識を備えた新しい世代の斬新な研究へと移り変わりつつある。しかし、そうした科学的な冷徹な研究が、ビルマ国民によって必要とされるかどうかは別問題であろう。野心的な政治科学者の一つの傑作よりも、むしろ Furnival の平凡な作品一つにこそ、ある意味では、至上の価値が秘められていることは忘れられてなるまい。古典的名著 Colonial Policy and Practice に吐露されたものと同質のシンパシーが、本書の行間にも脈打っていることを感じえないとしたら、不幸な話である。

いずれにせよ、本書は、ビルマ政治に関心をもつものにとって、必携の一書である。(矢野 暢)

D.A. Wilson; Politics in Thailand, 1962, Cornell Univ. Press, xv+307.

従来、論文を通じてのみ研究成果を世に問うていた Wilson (カリフォルニア大学助教授) の待望の書が出た。著者は、タイ政治の研究に関しては、現在の学界で他の追随を許さぬ地位を確保している。かれの研究水準が非凡なだけに、本書一冊を得たことによって、タイ政治研究の全体的水準自体が一挙に高まった感じである。

本書は、タイの現代政治の構造的分析を行なったものであるが、著者が一次資料を駆使し、また現地研究を通じてそれを行なったことによって、従来知られえなかったタイ独自の権力機能のメカニズムが、その全体像においてほぼくっきり描き出されるに至った。た